

「やらされ探究」から「マイ探究」へ!

生徒が主体的に取り組む学習であるはずの探究学習に「やらされ感」を抱く生徒、教師は少なくない。探究学習を生徒、教師が自分事化し、よりよいものとするためにはどうすればよいか、事例を通じて考える。

生徒、教師がともに活動の見通しを持ち、 紆余曲折を大切にしたい探究学習を実現 静岡県立駿河総合高校

ターニングポイント

✓ 探究学習の流れ、特に活動間のつながりをまずは教師が理解できるようにした
✓ 試行錯誤によって充実した探究学習の事例を、生徒、教師に積極的に共有した

設定したテーマが大きいために 見通しが立たず、困惑する生徒たち

静岡県立駿河総合高校の総合的な探究の時間では、1年次は自分を知るための「自己探究」、小論文作成、2年次は防災をテーマに課題発見・問いづくり・仮説設定・実践・振り返り、3年次は自分と社会とのかわりを今後の生き方として発信する「未来スピーチ」に取り組む。総合的な探究の時間の中核となる2年次の活動では、国際、教育、行政といった様々な視点で10の企業・機関と連携し、生徒は行動計画を立案・実行。これまでの成果としては、例えば避難所の子どものストレスを軽減するための「ぬいぐるみブランケット」を製作したり、英語・日本語を併記した防災ポスターを災害の種類別に作製したりした。

2022年度に防災をテーマとした探究学習が始まった当初は、生徒の主体性には差があったと大井詳子先生は振り返る。

「その日に取り組んだことが次の活動にどうつながるのか、見通しを持てず、ワークシートをとりあえず埋めるだけの生徒がいたり、防災という大きなテーマを前に、『高校生の自分が頑張っても……』などと消極的な気持ちになる生徒がいたりしました」

そうした生徒の状況を変えようと、教師が具体的な活動内容を生徒に指示してしまうなど、探究学習が教師主導になるケースも見られたと、同校の探究学習の企画・運営を担う学校魅力推進課の渡邊奏太先生は語る。

「教師も生徒も、探究学習は紆余曲折を伴うものであるという共通認識を持つことで、目の前の1コマの活動をこなすことにこだわらな

学校概要

設立 2013（平成25）年
形態 全日制／総合学科／共学
生徒数 1学年約200人
2025年度卒業生進路実績 国公立大は、群馬大、山梨大、静岡大、都留文科大、長野大、静岡県立大、静岡文化芸術大、高知工科大などに14人が合格。私立大は、順天堂大、東洋大、日本大などに延べ139人が合格。短大・専門学校進学81人。就職34人。



渡邊 奏太
学校魅力推進課
わたなべ・かなた
同校に赴任して5年目。地理歴史・公民科。



大井 詳子
2年部学年主任
おおい・しよつこ
同校に赴任して7年目。工業科（建築）。



小泉 亜衣子
学校魅力推進課長
こいずみ・あいこ
同校に赴任して7年目。英語科。

お勧めの分掌・

管理職

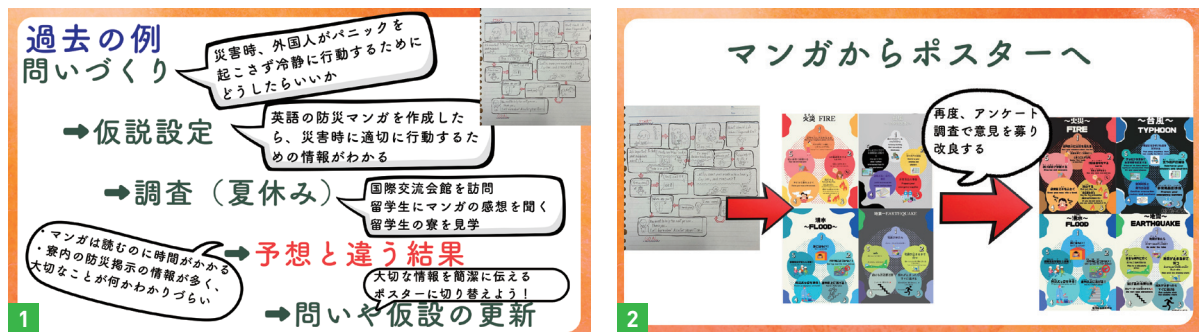
教務担当

進路担当

担任

図 探究学習だからこそ直面する紆余曲折を、生徒、教師がともに理解する

「産業社会と人間」と総合的な探究の時間を学校魅力化の中核に据える同校では、総合的な探究の時間の年間活動計画や各コマの授業案、授業で使用するワークシートの作成などは学校魅力推進課が担当している。同課が重視するのが、生徒、教師に「探究学習では紆余曲折があるのがあたり前」という認識を持ってもらうことだ。同課が教師間での探究学習の指導・支援の目線合わせと、生徒に対する探究学習の流れの説明を目的に作成した資料では、フィールドワークを通して当初の予想とは異なる結果を得た生徒が、問いや仮説（図の①）、最終的な成果物の形（図の②）を更新した過程を紹介している。そのように、探究学習が最後まで順調に進んだケースよりも、試行錯誤を繰り返したケースを生徒や教師に共有することで、成果や結果以上にプロセスを重視するのが探究学習であるということを学校全体で共通認識することができると、同課は考えている。



※学校資料を基に編集部で作成。

い、生徒主体の学びにしようと考えました」

紆余曲折を受け入れられる環境づくりを多面的に進める

同校は、教師が見通しを持って生徒に伴走できるよう、学年団で使用する探究学習の授業案の改良を重ねてきた。

「1コマの活動内容だけではなく、その活動が次時の活動にどのようなつながるのか、あるいはその日のうちに終わっておくべきものなのかといったことについても説明するようにしたこと、先生方が余裕を持って生徒の活動を見守れるようになりました」（渡邊先生）

生徒に対しては、探究学習の流れを年度当初だけでなく、年度の節目にも繰り返し説明するようにしたこと、学校魅力推進課長の小泉重衣子先生は語る。

「その際、校内での探究にとどまらず、実際にアクションにつなげた先輩たちの事例を紆余曲折の過程とともに紹介し（図）、高校生の自分たちにも社会を動かす力があることや、今は試行錯誤していても道はいずれ拓ける可能性があることを伝えました」

同校は、学校における心理的安全性を高めるため、「対話する」「受容する」といった、生徒・教師共通の行動指針「駿総ベース」を策定。その指針を探究学習の中で生徒に提示し、仲間と対話を重ねながら新しい価値を創造することを促している。また、教科の授業でも対話の時間を多くつくり、生徒が互いの価値観

を尊重しながら学べるようにすることで、心理的安全性の面でも教科の授業と総合的な探究の時間を往還させている。

26年度の総合的な探究の時間では、「よいチームとはどのようなチームか」をテーマに話し合ったり、自分たちのチームで大切にしたい価値観を言語化したりすることで、チームの信頼関係を強固にする「チームビルディング」に取り組んでいる。さらに年度途中には、チームの活動の進捗状況や直面した課題をほかのチームと共有し、打開策を考える「プロジェクトチューニング」の時間も設けている。

そうした様々な改善を重ねた結果、探究学習に対する生徒の主体性は向上。1年間の総合的な探究の時間が終わった後も、企業と連携した活動を自主的に続ける生徒が現れたり、そうした生徒に触発されたほかの生徒がボランティアとして同活動に参画したりしている。

「防災という地域課題を軸に、生徒、教師が探究学習に取り組みやすい環境を追求してきました。今では『駿河総合高校は防災探究の学校』というイメージを持って中学生が入学してきますし、新しく赴任してきた先生方も、生徒と地域に出て行くことに期待感を持っています」（大井先生）

「今後は外部の連携先との関係強化のため、問いや仮説の設定、当事者へのインタビューなどに取り組む生徒の様子を伝えるニュースレターを発行する予定です。そのように、探究学習の改善に向けて様々なアイデアを実現させていきたいと思っています」（小泉先生）